

## 和中庵を読む — 近代邸宅の行間 —

2018年度から三ヶ年で実施されることとなった〈和中庵プロジェクト〉では、京都造形芸術大学の大学院生、学部生、卒業生、教員による多様な専門領域の作品を展示公開しています。

昨年12月に第1回目の展覧会が実施された際、プロジェクトの参加者は〈一つの建築は一冊の書物として考えられる〉という提唱を共有して、和中庵がもつ歴史と空間的特色をそれぞれの視点から読み解き、アートやデザインの作品として和中庵の空間に展開させました。

昨年の「和中庵を読む」試みは、今回の第2回展でも踏まえられ、新たな参加者を加えた「近代邸宅の行間」と題する展示企画へと繋がっています。

鹿ヶ谷に立地する美しい歴史的邸宅と、その内外で展開するユニークな作品群を、ぜひご高覧ください。

### 和中庵プロジェクト

〈和中庵プロジェクト〉は歴史遺産である和中庵の新たな価値創造を重点課題とし、京都造形芸術大学特別制作研究費助成「芸術による近代建築・庭園遺産の活用—学科・領域横断型展覧会の開催」(2018年度～2020年度 / 研究者代表：仲隆裕 / 共同研究者：八幡はるみ、松井利夫) により実施されています。



会期中イベント

11月7日 | 木 |

14時～15時

歴史遺産学科公開授業

「庭園考古学」

11月9日 | 土 |

13時～15時

出展者による作品解説

15時30分～17時

レセプション



和中庵

を

読む

— 近代邸宅の行間 —

2019年11月7日(木) - 11月17日(日)  
午前10時～午後5時(会期中無休 / 最終日は午後4時まで)  
和中庵(京都市左京区鹿ヶ谷桜谷町)

## 第2回〈和中庵プロジェクト〉参加者

### 大学院芸術研究科芸術専攻(博士課程)

小山 龍介 Ryusuke Koyama  
 曾 品耘 Tseng, Pinyun  
 田辺 真弓 Mayumi Tanabe  
 田中 宏治 Koji Tanaka  
 姚 翀 Yao, Chong

### 美術工芸学科

伊藤 史江奈 Shiena Ito  
 大森 万里奈 Marina Omori  
 丹生 あさ Asa Niu  
 濱本 陽菜 Hina Hamamoto

### 文芸表現学科

田村 悠一郎 Yuichiro Tamura  
 早川 時矢 Tokiya Hayakawa

### 教員

家成 俊勝 Toshikatsu Ienari  
 (空間演出デザイン学科)  
 河野 愛 Ai Kawano  
 (美術工芸学科)  
 佐藤 博一 Hirokazu Sato  
 (大学院芸術研究科)

### 歴史遺産学科

石岡 樹 Tatsuki Isioka  
 近藤 真愛 Mai Kondo  
 野口 幸太郎 Kotaro Noguchi  
 藤原 りか Rika Fujiwara  
 増子 友教 Tomoyuki Masuko  
 松原 明里 Akari Matsubara

杉本 宏 Hiroshi Sugimoto  
 (歴史遺産学科)  
 高橋 耕平 Kohei Takahashi  
 (美術工芸学科)  
 辻井 南青紀 Naoki Tsujii  
 (文芸表現学科)  
 仲 隆裕 Takahiro Naka  
 (歴史遺産学科)  
 長尾 崇弘 Takahiro Nagao  
 (情報デザイン学科)

### 大学院芸術研究科芸術専攻(修士課程)

菱野 裕馬 Yuma Hishino  
 陳 彦彤 Chen, Yan-Tong

奥田 晏 An Okuda  
 奥野 葉留香 Haruka Okuno  
 小野 花織 Kaori Ono  
 加藤 陽香 Haruka Kato

湊 颯佳 Hayaka Minato  
 川田 恵悟 Keigo Kawata

藤本 由紀夫 Yukio Fujimoto  
 (大学院芸術研究科)

### 大学院芸術研究科研究生

アーロン・カープ Aaron Karp

窪田 佳乃 Takano Kubota

宮田 瑛 Akira Miyata

松井 利夫 Toshio Matsui  
 (大学院芸術研究科)

### 卒業生(ゲスト・アーティスト)

櫻井 彩 Aya Sakurai

小坂 美鈴 Misuzu Kosaka  
 田中 杏果 Kyoka Tanaka  
 山本 佳夜 Kaya Yamamoto  
 平井 志歩 Shiho Hirai

安田 奈未 Nami Yasuda

村松 美賀子 Mikako Muramatsu  
 (文芸表現学科)

### 空間演出デザイン学科

野口 結加 Yuika Noguchi

松田 佳奈子 Kanako Matsuda  
 若宮 さくら Sakura Wakamiya

八木 良太 Lyota Yagi  
 (空間演出デザイン学科)

陳 豪華 Chen, Hao-Hua

八幡 はるみ Harumi Yahata  
 (美術工芸学科)

1『lighting/moiré stained glass』

2019年  
視覚効果のインスタレーション

野口結加  
協力： 藤本由紀夫

壁に十字架の日焼け跡がある、小さな部屋が印象的だった。壁から動かすこともなく、長年そこにあったのだろうその薄いシミは、そこに流れた時と歴史、思想までを静かに語っているようだった。  
窓にはモアレ現象が起こるように工夫を施した。わたしたちの動きや呼吸で見え方が変化する。

3『福音の見取り図』

2019年

テキスト：田村悠一郎  
組版協力：佐藤博一

和中庵をイメージした文芸作品。建物内に残る傷痕にヒントを得、記憶の中に残る風景と、変化していく個人の葛藤を詩文形式で創作したものである。

6『Silvering ( sister’s hand mirror #1 )』  
『Silvering ( sister’s hand mirror #2 )』

2019年  
デミジョンボトルの破片、銀鏡加工、水性樹脂、デジタルプリント

河野愛

壊れた古いガラスビンの内側を銀鏡加工し、作り上げた手鏡。和中庵でも日常的に使われていたであろう手鏡をモチーフとした造形を通して、過去に和中庵で暮らしたシスターたちの物語を想像する。ビンが持つ記憶と和中庵の記憶が交錯する。

7『テクスチャーを読む』

2019年  
写真、インクジェットプリント

小山龍介

和中庵の土壁や石垣、木の板などがもつ、さまざまなテクスチャーを撮影した作品。昨年の『和中庵を読む』では、カタログのような冊子形式で作品発表を行った。今回はそれを引き伸ばしてプリントすることで、テクスチャーの中に迷い込み、そこに刻まれた歴史を追体験するような作品として再提示した。

8『Parallax Cube』

2019年  
表面鏡

八木良太

橋の柱の中心を合わせるように、鼻の頭が立方体の辺に触れるほど近付いて見ることで、両側の風景が合成される。

10『風は渡る』

2019年  
風鈴、ステンドグラス、障子紙   サイズ可変

Aaron Karp

この作品は、西洋と日本の家をつなぐ橋に設置しており、その二つの建物に関係するサウンドスケープを作り出したものである。ステンドグラスと、障子戸を、別々の建物素材のモチーフとし、2つの異なるスタイルの7つの風鈴を用いている。それらは日本と西洋の明確な分離で構成されているが、2つの異なるスタイルの風鈴の音が混ざり合うことで、日本でも西洋でもないバレットの音色が生まれる。

"This work creates a sonic equivalent to the visual experience of standing on the bridge nestled between the Western and Japanese homes. There are seven wind chimes in two different styles, which were derived from the architectural foci of the separate buildings, using stained glass and shouji respectively. While the visual field consists of a clear separation between Japan and the West, the sounds of the two different styles of wind chimes mix to create a palette that is neither clearly Japanese nor Western, but occupies a space in between."

2『Suburban life』

2019年  
インクジェットプリント、ベニア板、塩ビシート、他

菱野裕馬  
協力：高橋耕平

郊外の風景を画像に留めることで各地区の文化と経済のありようを端的に表象する写真群。最大公約数的に均一化された戸建達は曇天の下でのっぺりと漂い、何にも偏らないフリをしながら、和中庵とは対照的な方法で住まうことの「快適さ」を奏でる。

5『和中庵の庭園考古学的研究』

2018～2019年  
H.40cm×W.1900cm  
庭園実測平面図、和中庵庭園水系模型ほか

杉本宏、仲隆裕  
歴史遺産学科2・3回生チーム：石岡樹／近藤真愛／野口幸太郎／藤原りか／増子友教／松原明里／湊颯佳／川田恵悟／宮田瑛／安田奈未／松田佳奈子／若宮さくら／陳豪華  
大学院生：陳彦彤

大正末期から藤井彦四郎邸として造営が始まった和中庵の庭園。わずか90年の間にも、庭園は変容してきました。和中庵の庭園の特徴は、地形を生かしたダイナミックな水の造形にあったのではないか、との仮説から、歴史遺産学科 2・3 回生の「庭園考古学」はスタートしました。発掘調査は現在も進行中ですが、現時点での調査結果を動画並びに図面、模型を用いて報告いたします。  
なお、11 月 7 日午後は、発掘調査現場を公開いたしますので、発掘調査の様子をご案内いたします。

9『鹿の庭』

2019年

テキスト：早川時矢  
組版協力：佐藤博一

「鹿の谷」は、ここ鹿ヶ谷という土地名の由来の一つである「比叡の高僧が山で遭難した時、鹿に導かれ難を逃れた」という説話を元に作成した作品である。既存の物語を分解、再構成し、序破急の三部構成で制作された作品となっている。

11『花入れ』

2019年  
ガラス

櫻井彩

内を見渡して、空間を読む。  
外に出て風の声を聴く。  
花を生けて想いを伝える。  
さて、鉈を持って庭に出てみましょう。

12『Pont des Toyosato』

2019年  
mixed media   400×100×45mm   Aluminum5052

家成俊勝／長尾崇弘／平井志歩

窓から眼下に見える「豊里橋」と名付けられた橋の材料は巨大な白川石の一枚板でできています。この邸宅を建てた藤井彦四郎は滋賀県五箇荘村の生まれですが、そのすぐ背後にある織山から北を臨むと生家越しに豊郷町が見えます。彦四郎はかつて織山を登り、豊郷村を眺め、その先の敦賀、そしてパリにまで意識が繋がっていたはずです。

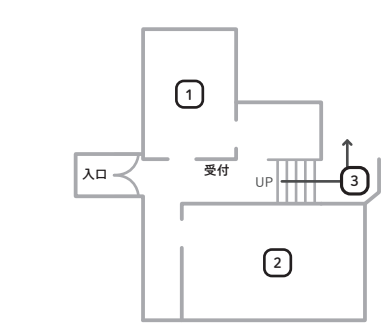
13『画中仙』

2019年  
H.90cm×W.40cm  
墨、宣紙

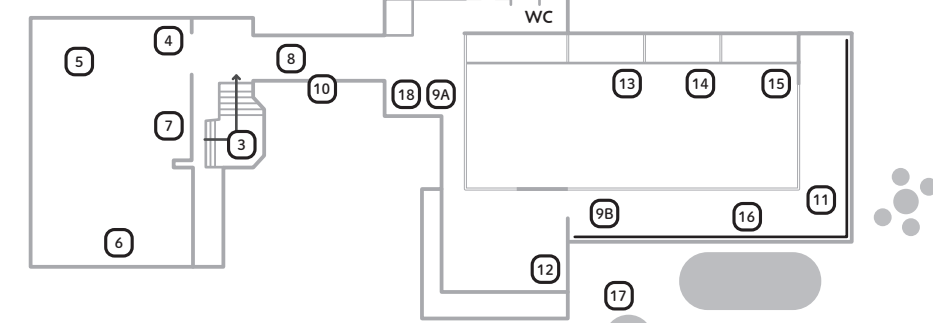
姚狹

中国の怪談と日本の怪談をモチーフにして、絵に宿り、人の魂を食う女の幽霊を描いた。中国で「画中仙」という伝説がある。その伝説の一種は絵に宿る女の霊が屋敷の主人を誘惑し、彼の精力を吸い、死亡を招く。その霊が出現する様子を日本の「影女」の登場の形を借り、現す姿を表現している。

## 1階



## 2階



14『後続の途』

2017年  
インクジェットプリント

佐藤博一

彼方から聞こえる声に突き動かされて決心する。それが「覚悟」に繋がれば良い、と考えながら、芒ばかりを撮影していた。

15『インターゾーン』

2019年  
本（判型:天地195x左右148mm、本文108ページ）、映像（約17分）

テキスト：辻井南青紀  
画像・映像：佐藤博一

このテキストは詩でも小説でもなく「ある何か」「あるどこか」をめぐる提起です。物語にとって自明のことである「今」「ここ」を問い直してみたら、物語は、世界は、いったいどう見えるのか、という問いの試みです。

16『和中庵装飾紋水引幕』

2019年  
H.40cm×W.1900cm  
綿布に黒染め抜染

全体ディレクション： 八幡はるみ  
デザインリサーチ及び制作：伊藤史江奈／大森万里奈／丹生あき／濱本陽菜／松井詩／大山実乃里／奥田晏／奥野菜留香／小野花織／加藤陽香／窪田佳乃／小坂美鈴／田中杏果／山本佳夜

学部1年生・2年生の有志チームが和中庵を取材。建築や内装の細部に見られる意匠を探してみた。いたるところに見られる和洋折衷のディテールはそれぞれがとても面白い。抜き出して「紋」とした。紋を並べ、型紙、染め、糊置き、抜染という全工程を踏み、「水引幕」を染め上げた。和中庵のハレの日を祝いたい。（※「水引幕」とは、劇場などで舞台最前部の上方に、間口いっぱいに横に張った細長い幕のこと）

18『something there』

2019年  
mixed media、インスタレーション

田辺真弓  
協力： 藤本由紀夫

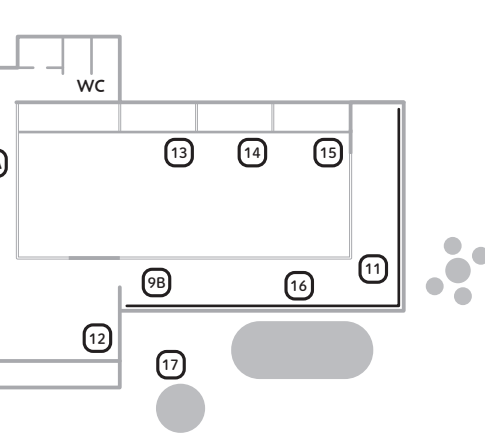
和中庵は懐の深い空間だ。今でも何かを受け入れようとしていると感じられた。私はそこに身体の一部のような“何か”を置いてみる。それによって和中庵がどのような表情をつくりだすかに興味がある。

4『和中庵の空間を認識するための試み  
ー伝統工芸の木目込み技法を用いた触知図のボールー』

2019年11月  
サイズ：45cm球体、素材：発泡スチロール、布、技法：木目込

田中宏治

和中庵の空間を多種類の感覚（触覚、視覚、嗅覚、聴覚）で認識するために、現在研究を行っている伝統工芸の木目込み技法を用いた立体的な触知図のボール「触知ボール」で制作した作品である。視覚障害者および晴眼者の両者を対象としている。



17『Underwater destiny』

2019年  
手のひらサイズ、未焼成土器、墨、井戸、水

松井利夫

人面墨書土器と呼ばれるものを初めて見たのは2011年東日本大震災の年の夏だった。涼むためにふらりと逃げ込んだ考古資料館で埃っぽい展示ケースのガラス越しに野菜を並べたかのような無数の土器と目が合った。その土器には不思議な顔が描かれていて、筆使いのうまいものや稚拙なもの二つとして同じ表情はない無数の顔がぼくを見ていた。ちょうど大振りの茶碗くらいの大きさで口縁部にかけてくびれたのち軽く反っているからなおさら顔が強調される不思議な器形、奈良時代に流行った天然痘や疫病を払うために疫病神の顔を土器に描き水に流すことで祓い清めたのだろうと書かれていた。奈良時代にこんな劉軽な表現があったことがうれしく歴史の教科書には出てこない人々の顔が見えた気がした。そして体の火照りが覚めた頃にはそのことをすっかり忘れていた。和中庵は小高い丘の上に立ち南面には谿があり水音が風とともに這い上ってくる。その水音は縁側のすぐ下にある井戸のあたりで鎮まる。その井戸のことばかり考えていたある日 N 先生が「井戸を掃除したら底が出てきました。」と教えてくれた。当たり前だけど井戸に底があることが不思議に思えた、井戸の底とは井戸の水面だと思っていたから。何かを井戸に投げ込みたくなった、水面から水底までの距離をゆっくり沈んでゆく時間を感じてみたいと思った。ゆっくり溶けてゆく時間。カチカチ山の泥舟のように土の器を浮かべてみたらどうなるか、あの人面墨書土器ならどんな時間を描くのか。水中で鱗片を剥がしてゆくようにキラキラと水底に沈んでゆく土器の表皮、描かれた墨の顔は剥がれ落ち水底に黒い模様を描く。砂時計の砂のように剥がれ落ちた土や砂粒が静かに堆積してゆく様子を眺めていると、不意に器の底が抜け沈没船のようにゆっくり沈みだした。その土器片を追いかけると口縁の円環が井戸の底で折り重なり時間が止まる。やがてその輪郭も溶けて崩れて土器とともにあった色んな記憶が井戸の底に同化してゆく。

＊ 展示コーディネート 佐藤博一

＊ ドキュメンテーション 村松美賀子

＊ グラフィックデザイン 曾品転